

古代ギリシアにおける馬の競技について

村 山 鉄次郎

はじめに

古代ギリシアのスポーツは、近代スポーツ発祥にいたる源流と考えられ、多くの研究者たちによってとくに陸上競技やボクシングやレスリングなどの競技について語られてきた。しかし、馬を使った競技に関しては、あまり多く語られていない。その理由のひとつは、おそらくオリュピアの遺跡に馬の競技場（ヒッポドロモス）の痕跡が跡形もなく消え去ってしまっていることからくるのであろう。

近ごろ、スポーツ史の研究が、欧米でさかんになり、その論文の中に古代の、馬に関する競技を取り扱ったものが多く見かけられるようになってきた⁽¹⁾⁽²¹⁾⁽²⁶⁾⁽²⁷⁾。そこで、古代ギリシアのスポーツに関心を抱いている折りから、馬を使った競技を古代ギリシア世界を中心に、小論で取り上げてみることにする。

I ギリシアへの馬の競技の伝来

もともと、ギリシアで競走に使われた馬は、東方から輸入されたものといわれている。文書に残る馬の養育の記録は、有名なキックリ（小アジアのミタンニ王国の人：Kikkli）によって前14世紀に、ヒッタイト人の戦車用に、馬の飼育とトレーニングシステムについて詳しく書かれた、くさび型の文字

の最古の馬の書である⁽¹⁾。

ところで、Decker⁽¹⁾は、ギリシアに馬が登場したのは、ミュケーネ時代で、前13世紀のものと思われると、ティリュンスから出たアンフォーラ⁽²⁾を証拠として指摘している。その壊れた壺の表面に描かれた絵は、前後して2台の馬に引かれた戦車を表わしているようであり、彼はそれを戦車競走であるとしている。このアンフォーラの絵の戦車の操縦者は、無防備で馬を御していることから、競走をしていると考えられるからである。そうであるならば、紀元前2千年紀(前1千年～2千年)にギリシア人がすでに戦車を知っていたことになる。上述のDeckerはこれを支持して、それ以前のエジプト(前15世紀)や古代オリエントにはすでに馬に引かせる戦車⁽³⁾があったことからギリシアに伝えられていても不思議はないと考えている。最近では、当時の情報伝達の早さはこれまで考えられていたよりはるかに速かったと考えられるようになってきているからである。

また、タナグラから出た粘土の棺に描かれた絵⁽⁴⁾は、20年あまり前に発見されたものだが、葬儀の場面を思わせる。そこには黒と赤に色わけされて塗られた2台の戦車が向かい合っている。これは前13世紀のものといわれる。

II 当時の戦車(あるいは馬車)の構造

古代の馬車(もしくは牛車)の構造が最も分かりやすく明瞭に示されているのは、前3000年紀に発展した古代インドのモヘンジョ・ダロ出土のテラコッタの荷車⁽⁵⁾である。この作品の年代は定かではないが、車輪は円盤状で輻(や)⁽⁶⁾がなく、2頭の牛の首の上に「輶(くびき)」があり、これと直角に「輹(ながえ)」が結ばれ、この輹が車体の下部に取り付けられている。

乗馬は連獣(Gespann: 2頭並べてくびきに繋いだことからこのように呼ぶ; 馬車)のあとになる。本来野性であった馬を馴らす難しさもさることながら、現代のように鞍やあぶみがなかった時代では、騎乗者の安全な操縦は困難だったのだろう、2頭の馬をくびきに繋いで馬車に繋ぐほうが、裸馬に

乗るよりははるかに簡単だったであろうことは容易に想像できる。

馬ではないが、馬に似た2頭の動物（ラバではないかといわれている）に4輪の荷車を引かせた絵が、ユーフラテス河下流のウルの王墓から出土したのが知られている。いわゆる「ウルの軍旗」⁷⁾であるが、前3千年紀のものと考えられるから、オリエントではおそらく前18世紀に連獣が発明されたというDeckerの説にはやや疑問が残る。

2輪の、2頭に引かれた馬車（戦車）は、車輪が円板状のものから、4本の輻（や＝スポーク）、そして6輻（ふく）、8輻へと進むにつれて馬車が軽くなり、性能が向上するのであるが、ティリュンスのものもタナグラのもの（前2千年紀）も4輻である。幾何学文様期（前1200年～前8世紀）に属するアッティカ式クラテル（混酒器）⁸⁾に表現された2頭立て戦車も車輪は4輻である。

これに対して、エジプトのテーベ出土のツタンカーメン王（在位、前1361～52：第18王朝）の宝物のうちの儀礼用の黄金の団扇⁹⁾や王の彩色棺¹⁰⁾には、2頭立て戦車で狩りをする様子が表現されているが、いずれも車輪は6輻である。

なお時代が下って、前5世紀初めの、彫像の台座に彫られたアッティカの浮き彫り¹¹⁾には、4頭立て戦車が彫られているが、これも4輻である。

ところが、場所はイタリア中部のキウジの町にはなるが、ほぼ同時代（前5世紀）の、ギリシアの影響を受けたといわれるエトルスキの絵「2頭立て戦車の壁画」¹²⁾では、車輪は8輻である。もっと早くには、（前7世紀）ニネヴェの王宮で発見された「アッシュール・バニパル王（在位、前668～626）のパレード」¹³⁾では、8輻の4頭立て戦車が表現されている。

さすがに紀元後の（12年）ローマ帝国の時代になれば、「アウグストゥスのカメオ」¹⁴⁾にみられるように、立派な8輻の戦車が定着している。

概観して、ギリシアの車輪は、他の周辺諸国に非常に遅れをとっているように見受けられる。しかし、ギリシアの影響を強く受けていたと思われるエ

トルスキの壁画(8幅の戦車)にみられるように、あるいはギリシアでも車輻の数は、表現されたものと違っていただのかもしれない。つまり、様式的表現として4幅を実際よりも遅くまで表現上使ったのかもしれないので即断はできない。というのは、ギリシアでは競技としては戦車競走が、他のどこよりも盛んに展開されたからである。

Ⅲ 古代ギリシアにおける戦車競走と騎馬競走

前述のごとく、古代の美術品が物語っているように、すでに早くからギリシアにおいては戦車が用いられた。Deckerは、戦車は、ミュケーネ時代以前のギリシア人にとっては、貴族たちのステータス・シンボルであり、輸送手段であるとみなされ、前16世紀には多くの墓碑に描かれ、その墓碑はミュケーネの墓の周辺を飾っていた⁹⁹と述べている。

多くのスポーツ史家が問題にするのは、きまってホメーロスの「イリアス」に叙述された『パトロクロスの葬送競技』¹⁰⁰における戦車競走である。他の7種目に突出して戦車競走を扱っている。ここでは、競技者は自分自身であり、賞品も出場者全員に渡されるのに対して、のちの競技においては、戦車の持ち主が御者を雇って操縦させ、勝利に際しては持ち主が勝利者となるシステムとは異なっていた(表彰も、優勝者のみでただの冠)。もちろん例外もあって、スパルタ人ダモノンとその息子エニュマクラティダスは、前5世紀に郷里の近くの地方的な競技会ではあるが、御者としてみずから勝利を得たことを誇る碑文を残している¹⁰¹。

馬と戦車の持ち主が、勝利者になるシステムは現代と同じであるけれども、持ち主として戦車競走に参加することは並大抵のことではなかった¹⁰²。それが4頭立ての戦車であれば、なおさらである。

まず、馬の訓育だけでも、走り回るための広い広場、寝るための家畜小屋、餌を与えたり世話をする人、完全に組織だった厩舎であれば専門的なトレーナー、戦車操縦者がなくてはならず、それに獣医も必要である。戦車の

製作と維持にかかる費用も見込まなければならない。

シシリーの僭主や北アフリカのキュレネの所有者からも優勝者が出ていた（Ⅶ章に後述）が、たとえばそのような所からパンヘレニック競技（オリュンピア、ピュティア、イストミア、ネメアの競技を指す）に参加したいと思えば、その費用は相当の額にのぼったであろう。小さな派遣団を組織し、船の輸送に頼らなければならなかった。4頭立てであれば、4頭の馬のみでは足りず、補充の馬も用意しなければならない。飼料のストックも車の部品の予備も必要だし、馬の世話をする従業員や操縦者、そのほかに車大工、動物を車に繋ぐことに詳しい皮細工師も同乗する。この船旅のあと、最寄りの港から、競技するところまで、それらすべてを輸送するのだが、そのためには荷車が一番よい。したがって、荷車も運ぶことになる。当然宿泊を伴うが、野営をするのでテントとともに毛布、寝台が身分相応に必要となる。賄いのためにはコックの同伴と料理の必需品も携行することになる。そのほかに、戦車所有者間のつきあいとしての交際費も必要であったと思われる。

このように膨大な費用は、貴族の中でも特別な大金持ちにしか用立てることができなかった。ここまでしても、栄冠を得て名声を高めたいと願う貴族がかなり多かったし、一般市民は当然見る側にまわることになるが、このひとびともこの競技に熱狂したのである。このように戦車競走は、費用の面からみれば1頭の馬による騎馬競技よりはるかに経費を要するにもかかわらず、実はパンヘレニック競技会の華であった¹⁹⁾。

Ⅳ オリュンピアのヒッポドロモス（競馬場）と競走距離

オリュンピアのヒッポドロモスは、ゼウスの神域の南を流れるアルフェイオス川の氾濫によって、そのすがたをすっかり失ってしまったので、見ることはできないが、パウサニアスの「ギリシア記」²⁰⁾の中の詳しい記述から、およその見当はつけられる。これに加えて、Ebert²¹⁾がオリュンピアのヒッポドロモスの机上での復元に成功したので、かなり輪郭がはっきりとした。

J. Ebert は,

オリュンピアの競走路の距離を図1のように算出した。オリュンピアの競走路の規模が書き留められているビザンチンの度量衡のテキストをもとに計算したものである。それをもとに、各種競走の距離を算出している。

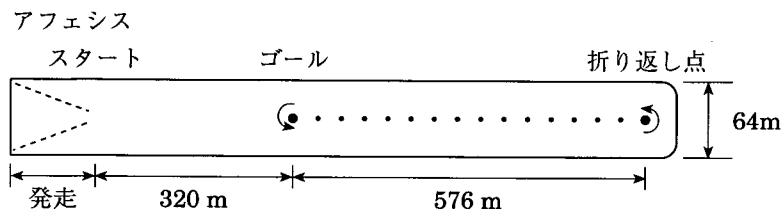


図1 オリュンピアの馬の競走路

助走部分は、パウサニアスが指摘する出走装置⁶⁴⁾（アフエシス＝舟のへさきの形で仕切が並ぶ）は幅3mの仕切られた部屋（？）になって前方が空いている。そこに停止綱が張られ、発走時には、一番後方の装置の綱が弛められ、馬がスタートする。その馬が次の装置にくると、その馬がスタートできるように、その停止綱は下ろされるというふうに、最後には、一番前の馬と同一線上に並ぶように工夫されている。

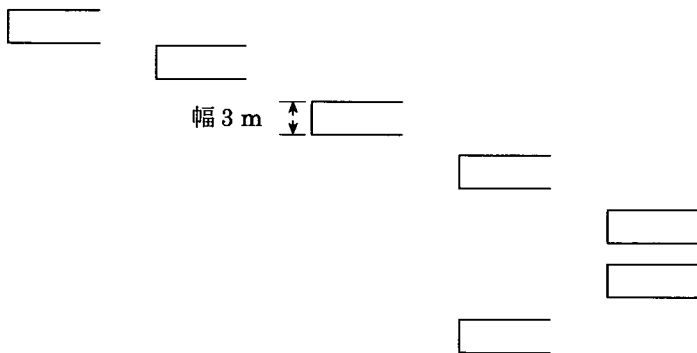


図2 アフエシス（出走装置）の配置（一部）

馬が全部揃ったところ（先頭の装置）から、最初の標柱まで320 m あり、その標柱から折り返し点の標柱まで576 m である。折り返して再び最初の標柱にくと、短いレースではゴールとなる。最初の320 m は戦術的なポジションをとるところで、最初の標柱から折り返し点の標柱を回ってゴールまではしたがって1052 m で、短距離戦ならば妥当な距離である。

Ebert は各レースを次のように算出した²⁴：

表1 競技種目と距離

競技種目	距 離
1. κέλητες πωλικοί :	320 m + 1 往復 (6 スタディオン) = 1472 m
2. κέλητες τέλειοι :	320 m + 2 往復 (12 スタディオン) = 2624 m
3. συνωρίδες πωλικάι :	320 m + 3 往復 (18 スタディオン) = 3776 m
4. συνωρίδες τέλειαι :	320 m + 8 往復 (18 スタディオン) = 9536 m
5. ἄρματα πωλικά :	320 m + 8 往復 (18 スタディオン) = 9536 m
6. ἄρματα τέρεια :	320 m + 12 往復 (18 スタディオン) = 14144 m

1 のケレテス・ポリコイは若駒の騎馬競走であり、2 のケレテス・テレイオイは成熟馬の騎馬競走、3 のシュノリデス・ポリカイは若駒の2 頭立て戦車競走、4 のシュノリデス・テレイアイは成熟馬の2 頭立て戦車競走、5 のハルマタ・ポリカは若駒の4 頭立て戦車競走、6 のハルマタ・テレイアは成熟馬の4 頭立て戦車競走である。

一度に出走する馬の数もしくは戦車の台数は10頭（または台）であったであろう。ソフォクレスの「エレクトラ」における戦車競走の参加台数は10台であり、事実を反映していると思われる。これは古代ローマの circus における事情とよく合致する。ローマでは原則として、12台を超えて4 頭立て戦車が出走してはならなかった。また出走装置の幅が3 m であったこともローマのスタートボックス (carceres : カルチェレス) の規模とほぼ一致する²⁴。

このアフェシスの発走装置で最も興味深いのは、先端にあるイルカの像と

アフェシスの中央に作られた台に仕掛けられた鷲の像である⁸²。スタートの合図で、鷲は飛び上がり、先端のイルカは落ちるという。鷲はゼウスを象徴し、イルカはポセイドンを象徴しているという。さぞかし見物であっただろう。

V オリュンピア祭への馬の競技（アゴン・ヒッピコス）の導入

ギリシア人は、徒競走、槍投げ、円盤投げ、幅跳び、レスリング、ボクシング、パンクラチオン、5種競技などをアゴン・ギュムニコスと包括的に呼び、戦車競走や騎馬競走のような馬の競技をアゴン・ヒッピコスと呼んだ。

古代ギリシアにおいて記録に残り、そのように信じられている、アゴン・ヒッピコスのオリュンピア祭競技への導入は、4頭立て戦車競走については前680年、騎馬競走については前648年となっている。さらにラバや若駒の競走が表2のように行われたことが Decker によって示されている⁸³。

表2 オリュンピア祭におけるアゴン・ヒッピコス

導入年	種目	距離
前680年	馬の4頭立て戦車	72スタディオ (13824 m)
前648年	競走馬	12スタディオ (2304 m)
前500年～前444年	ラバの2頭立て（アペーネー）	不明
前496年～前444年	走を挿入した雌馬（カルペー）	不明
前408年	馬の2頭立て戦車	48スタディオ (9216 m)
前384年	若駒の4頭立て戦車	48スタディオ (9216 m)
前264年	若駒の2頭立て戦車	18スタディオ (3456 m)
前256年	若駒の競走馬	6スタディオ (1152 m)

表2の距離の算出は、Ebert に基づくものである。表1のEbertによる距離の算出と距離が合わないのは、Decker が、アフェシスの先端から最初の標柱までの距離320 m を差し引いているせいである。

アペーネーやカルペーは前444年までで廃止になったが、これは観客に訴

えるところが少なかったせいであろう。アペーネーは、おそらく4輪の馬車もしくは荷車のようなものであり、迫力に乏しかったのだろうし、カルペーは、騎乗者が途中で下馬して、馬と一緒に駆けるものであったから、これもスピード感に乏しく、緊迫感を生み出さなかったに違いない。紀元後67年のローマ皇帝ネロのもとにおける、例外的な4頭立ておよび10頭立てレースについては考慮する必要はなからう（エリス人によって記録から省かれた）。

ただし、注意しておかなければならないのは、オリュンピアの大祭が再編成（パウサニアスが伝える通りであるとすれば）された前776年の第1回の競技会の競技種目が、徒競走のみであったということを鵜呑みにはできないということである。多くのスポーツ史家（Decker¹⁾、Bell²⁾、Weiler³⁾、Gardner⁴⁾など）が疑問を投げかけているように、ことに戦車競走については異論が多い。

すでにホメーロスによるパトロクロスの葬送競技に関して述べたように、戦車競走の突出した人気を考慮すれば、最初から実施されていても不思議はないと考える人たちが多いのである。とくに、オリュンピア競技の初期については十分に判っていないからである。Bellは、オリュンピアの年代学は、エーリスの哲学者で雄弁家のヒッピアスが前5世紀の終ごろオリュンピア勝利者目録を編纂し、これをアリストテレスが修正し、百年後にこれが改良されたがみな失われ、これをもとにギリシアの作家たちが編纂したものがもとで、最初の200年は曖昧模糊としているという。このように、彼は最初から、徒競走以外のスポーツもあったけれども、記録されなかったのだろうという立場をとっている⁵⁾。

また、Weiler⁶⁾は、どうしてオリュンピアの役人が、ホメーロスの詩の中で一番重要であったスポーツ、戦車競走を、競技第1回の前776年から前680年までの約100年も取り上げなかったのか疑問に思っている。

Ebert⁷⁾は、答えは第一に宗教的伝統に基づくものであろうと考え、彼は

また新たに創設された祭典はオリュンピア休戦が広くギリシア中に広まるまでの時間が必要であったし、また競走馬を収容するための適切な建物をたてる時間が必要だったのではないかという。

ほかの学者たち（とくに Gardiner²⁹⁾）は、前680年より早く戦車競走が行われていたに違いないという。「少なくとも、……徒競走、円盤、槍、ボクシング、レスリングそれに馬の競技が最初のオリュンピア競技会からプログラムに含まれていたことは疑いない。もし、たった一つの競技から発展したのだとしたら、それは武装競走か戦車競走であっただろう」と。

前述の Bell は次のように述べる³⁰⁾：娘ヒッポダメイアを手に入れるために、オイノマオスと戦車で競走した神話上の人物（この伝説はゼウス神殿の破風に彫刻で飾られて示されている）ペロップスは、ピンダロスによって詩われ、パウサニアスによってオリュンピアでもっとも名誉ある英雄とされている。オリュンピアのヒッポドロモスには、勝ったペロップスに栄冠を与えようとしているヒッポダメイアの彫像があったし、各オリュンピア祭では犠牲を捧げられていた。このようにオリュンピア伝説と密接な関係にある戦車競走が、百年以上も経ってから導入されたことに疑問を抱いている。

また、ホメーロスでは2頭立て戦車であったのに、オリュンピアでは最初は4頭立て戦車競走から始まったことについても、疑問を抱く学者が多い。これもその前に、2頭立て戦車競走があったのではないかと疑わせるものになっている。つまり、Bell の見方としては、アゴン・ギュムニコスが、ギリシア全土でギュムナシオンやパライストラで軍事訓練の目的をもって行われていたのであり、これをテストする絶好の機会がオリュンピア祭だったと考えるとき、戦闘にはまったく役立たなかった4頭立て戦車よりも、早くから戦争でも使われた2頭立て戦車のほうが先にくるのが自然だというわけである。もっとも、実際の戦闘では戦車から降りて戦ったらしいし、密集重装歩兵隊の導入によって、騎兵隊ですら地形に影響を受ければ活躍できなかったといわれている。

Ⅵ ピンダロスまでと他の著者によるアゴン・ヒッピコス

パウサニ阿斯は成熟馬の戦車競走が最初に認められた前680年にはテーベのパゴンダスが勝利者宣言を受けたと伝えている。

前648年、最初に騎馬競技（ケレース）がオリュンピアのプログラムに登場したとき、この競技に勝ったのは馬の飼育で特に知られたギリシア北部の、テッサリアのクラノンの人クラウキダスであった。おそらく富裕な貴族階級に属する人であろう。前述のように重装兵の密集隊は前7世紀の支配的な戦術になっていたけれども、テッサリアの平坦な地形は依然として、騎兵隊がこの地域における有力な軍事的勢力であることを保っていた。ヘロドトスは、「歴史」の中で、ペルシア陣営にまで、テッサリアの馬の優秀さが知られていたことに言及しているので納得できる結果である。

そのあと、140年ちかく記録が曖昧で、前564年にオリュンピアでアテネ人のカリアス⁶⁹が挙げられる程度である。オリュンピアの勝者リストは前512年にコリント人フェイドラスが、彼の持ち馬アウラで勝利をえたことを伝えている。パウサニ阿斯⁶⁹によれば、その馬はスタートで騎手を放り出し、そのまま走り続けてゴールを横切ったが、審判はこの馬の勝利を認めた。今日の競馬であればただちに失格であるが、ギリシア人はどのように考えたのだろう。重量など問題でなかったのかもしれないし、馬がひとりでゴールしたことを高く評価したのかもしれない。Decker は、これを神による恩寵とギリシア人は考えたのかもしれないという。この馬の持ち主フェイドラスの息子も次のオリュンピア競技会のケレースでリュコスという馬によって勝利を得（パウサニ阿斯では前508年）、さらにイストミアのケレースにもその馬で栄冠を得た⁶⁹。

そのほか、数多くの記述があるので、その中で主だったものだけを簡略に取り上げて見る。

▲Decker⁶⁹は、前7世紀中頃に4頭立て戦車でシュキオンのミュロンが

優勝したと述べている。彼はシュキオンのクレイステネスの祖父である。このクレイステネスの同名の孫は、前6世紀終りのアテネの改革者（前508年の改革）として知られている。オリュンピアにある「シュキオンの宝庫」はその時の僭主ミュロンが奉納したものだとパウサニアスは伝えている。

▲上述のシュキオンの独裁者クレイステネスはオリュンピアで4頭立て戦車競走で優勝した折に、娘のアガリステの婿を公募した。このとき応募者のひとりヒポクレイデスはラコニア踊り、アッチカ踊り、逆立ち踊りをして不興をかって失格となり、もう一人の応募者アルクメオンの子メガクレスが娘の婿として選ばれた。メガクレスは、のちのアテネの高名なペリクレスの祖先にあたる⁶⁹。

▲キモンは亡命中に、オリュンピアで4頭立て戦車で優勝した、同じ馬でオリュンピアでまた優勝したが、勝ち名乗りをペイシストラトス（時のアテネの僭主；前560～527年）に譲り、和解して母国に復帰した。さらにもう一度同じ馬でオリュンピアで優勝したが、ペイシストラトスの子らの手にかかって死んだ（3度優勝したことになる）。なお彼の同腹の兄弟ミルティアデスも4頭立て戦車競走で優勝した。また、ラコニアのエウアゴラスもオリュンピアで同じ偉業を成し遂げた（3度優勝した）⁶⁹。

▲アテナイのカリアスは、僭主ペイシストラトス（在位前560～527）の暴政に敵対した人物であるが、彼はオリュンピアで騎馬競技で優勝、4頭立て戦車競走で2位、それ以前にピュティアでも優勝した⁶⁹。

▲前416年 アルキビアデス（～前404年）がシシリーへ遠征する司令官になるための演説（彼の政敵ニーキアスがシケリア遠征は国を滅ぼすというのに対して）で「個人参加者としては前例のない、騎車7台を出場させ、1等、2等、4等の順位を独占し……」⁶⁹とアテネの評価を高めたと自負している。

▲オリュンピア競技には女性の参加は本来認められていなかったが、スパルタの王アルキダモス（在位前476～427年）の王女キュニスカは、オリュ

ンピア祭がこのうえなく好きで、女人の中で初めて馬を持ち、オリュンピアでの勝利をものにした⁶⁹。パウサニアスは、若駒の2頭立て戦車競走でベリスティケという女人も前268年に勝利者宣言を受けたと伝えている⁶⁹。

▲トゥーキュディデースは「戦史」⁶⁹の中で、オリュンピア休戦期間中の出来事（前420年）について詳しく述べている。ことの起こりは、オリュンピア祭の休戦期間中に、ラケダイモン人が、ペロポネソス半島西岸近くにあるエーリス領内にあるピュルコス城塞に武力攻撃を仕掛け、レブレオンに自国の重装兵部隊を送り込んだことに始まる。エーリス側は、定めによる罰金の支払を要求したが、ラケダイモン人は、その時はまだ休戦の布告を聞いていなかったとして、支払いを拒否した。エーリス側はその後さまざまな要求をしたが、結局ラケダイモン側がそれに応ぜず、ついにラケダイモン人は祭典からも競技からも締め出された。とはいえ、ラケダイモンに対する恐れから、エーリスは若年兵を武装させて待機させ、アルゴス、マンティネアからそれぞれ1000名の兵、アテナイから騎兵隊の応援を得て、祭典の期間中守備を固めて祭典を執り行った。しかしながら、この時の騎車競技に、ラケダイモン人のリーカスが所有する馬が、ポイオーティアの国有馬と偽って参加しており、しかも優勝してしまった。リーカスは自分の馬が優勝したことを示したいばかりに騎手（御者であろう）に栄冠を与えた。そこでラケダイモン人であることがわかり、審判から杖で打たれるという珍事が生じたと述べている。

▲成熟馬の2頭立て戦車競走が導入された前408年には、エリスのエウアゴラスが勝ち、若駒を駆る戦車競走が認められた前384年にはラケダイモンのシュバリアデスが勝ったとパウサニアスは伝えている⁶⁹。

パンヘレニック競技には、オリュンピア、ピュティア、イストミア、ネメアの四大祭典における競技があるが、6世紀前半からこれら四つの祭典は、巡回して競技するアスリートを生みだし、ペリオドス＝サーキット（*perio-*

δος)を形成した。首尾よく一人のアスリートが同じ種目で四つの祭典で勝利を得たら、ペリオドニケス (περιοδονίκης) と呼ばれ、たいへん名誉あることとされ、多くのアスリートに切望されるものとなっていた。ペリオドニケスというタイトルは、勝利の順番や年数は関係なかった。次々と順序よく勝利を収めたときには、ペリオドスでのペリオドニケス (περιοδονίκης ἐν τη περιόδῳ)⁶³と特別に呼ばれる栄誉に浴した。

ペリオドスで順序よく勝利するには完成するのに丸2年を要した。たとえば、最初オリュンピアから始まるとして、8月にオリュンピアで競技し、次の年の7月にネメアに行き、その翌年の春にはイストミアに行き、同じ年の8月に最後のプティアの競技に参加してそれぞれ勝利しなければならない⁶⁴。

ペリオドスの四大祭での勝利は、アスリートのみならず、競走馬の持ち主にとっても重要なものであり、ピンダロスの頌詩はこの四大祭のアゴン・ヒッピコスとアゴン・ギュムニコスの勝利を祝うものであった。

カルペー (馬の競走に下馬して走るのを加えたもの) が、オリュンピアに最初に取り入れられた年である前496年に、この祭典の騎馬競技 (ケレース) に、シシリーのアクラガス出身のエンペドクレースが優勝した。以後の50年間でアゴン・ヒッピコスで、シシリーの馬主がパンヘレニック競技会で少なくとも15回の優勝を遂げている。この数字は、相当のものである。この中でヒエロンによる勝利が6つを占めている⁶⁴。このヒエロンは、ピンダロスによって最も多くの頌詩を捧げられている。

Ⅶ ピンダロスの頌詩における勝利者

ピンダロスはギリシア最大の叙情詩人といわれ、前518年から前522年にボイオーティアで生まれたとされている。生まれた年については、彼自身が、デルフォイのプティアの祝典のとき、初めて産着に包まれてゆりかごに入れた⁶⁵と述べていることから、プティアの開催年度 (オリュンピア紀

の第3年)と係わるが、最も受け入れられているのは前518年である。以下は Sandys の訳本⁶⁹のうち特に解説によるものを採用した。

〈オリュンピア〉

●オリュンピア I ▲シュラクサのヒエロン：

ヒエロンは、兄のゲロン、弟のトラシュブーロス、ポリュゼーロスとともに4人兄弟であり、シシリーのゲラのデイノメネスの子であった。兄のゲロンがゲラの支配者となり、シュラクサを征服してその支配者になると、ヒエロンがゲラの支配者となり、兄が死ぬと、ヒエロンがシュラクサの支配者となった。

兄のゲロンもすでに、前488年にオリュンピアで、騎馬競走に勝っている。弟ヒエロンは、ピュティア（デルフィ）の騎馬競走に、前482年と前478年に勝ち、さらに同じ馬で前476年と前472年のオリュンピア競技で勝ち、次いで前468年には戦車競走で優勝した。パウサニアスによれば、ヒエロンの子デイノメネスによって建てられた像がオリュンピアにあったという⁶⁹。

●オリュンピア II ▲アクラガスのテロン：

テロンとその弟クセノクラテスは、前述のシュラクサの兄弟と縁を結んでいた。この縁者たちは、パンヘレニック祭のアゴン・ヒッピコスで活躍する人々であるから、簡単に関係を示しておく。

(アクラガスの兄弟)

テロンーポリュゼロスの娘
クセノクラテス

(シュラクサの兄弟)

ゲロンーテロンの娘ダマレタ
ヒエロンークセノクラテスの娘
トラシュブーロス
ポリュゼロスーテロンの娘ダマレタ

(ゲロンの死後)

テロンは、ほぼ前488年にアクラガスの僭主となり、前476年に彼はオリュンピアで戦車競走に勝った。それがこの頌詩で祝われたものである。

●オリュンピア III ▲アクラガスのテロン：

これも、上の前476年の勝利を詩ったものである。

●オリュンピア IV ▲カマリナのプサウミドス：

カマリナは前599年にシュラクサによって作られたが、反乱後、2度にわたってシュラクサによって破壊され、前461年に再建された。この頌詩はおそらく、前452年の戦車競走の勝利を詩ったものだろう。戦車の持ち主は、支配者ではなく自由市民である。

●オリュンピア V ▲カマリナのプサウミドス：

これは、ラバ（雄ろばと雌馬の子）引きの馬車による勝利を祝ったものであろう。年代は、前448年あるいは456年ともいわれ明瞭でない。

●オリュンピア VI ▲シュラクサのハゲシアス：

ハゲシアスはシュラクサの市民で、アルカディアのステュンパロスの市民でもあった。彼はシシリーではヒエロンの一味であった。これは、早くて前476年遅くとも前472年のラバ引きの馬車のものであろう。

★こあとに続くオリュンピアのアゴン・ギウムニコスの頌詩に詩われた優勝者

VII ロドスのディアゴラス（ボクシング）

VIII エギナのアルキメドン（レスリング）

IX オボスのエファルモストス（レスリング）

X と XI ロクリ・エピゼフュロンのハゲシダモス（少年ボクシング）

XII ヒメラのエルゴテレス（長距離走4800 m?）

XIII コリントのクセノフォン（5種競技の短距離走192 m）

XIV オルコメノスのアソピコス（少年短距離走192 m）

〈ピュティア〉

●ピュティア I ▲アエトナのヒエロン：

前476年にヒエロンは、エトナ山の近くに移民を送り、山の名にちなんでこの都市をアエトナと名付けた。このように、アエトナの基礎を造ったことから、ピュティアの前470年の戦車競走で勝利した折に、伝令官から「アエトナ人」と呼び上げられた。

●ピュティア II ▲シュラクサのヒエロン：

これは、ピュティアの勝利ではなく、テーバイのイオリイア祭での戦車競走の勝利を詩ったものではないかといわれる。

●ピュティア III ▲シュラクサのヒエロン：

これはヒエロンの馬フェレニコスによって騎馬競走で獲得したピュティアの勝利を詩ったものである。この頌詩の注釈者は、彼が勝利を得たのは前482年と478年に当たると述べている。このフェレニコスは、オリュンピアIで詩われた同一の馬であるとされている。事実とすれば大変な偉業を成し遂げたことになる。

●ピュティア IV ▲キュレネのアルケシラオス：

キュレネの出であるアルケシラオスは、前462年のピュティア競技で戦車競走に勝利した。貴族の一人であるダモフィロス、王に対する貴族たちの暴動に加わったかどで追放されていた。彼は故国への復帰を願って、王の機嫌をとり結ぶためにこの詩（王の勝利の賛辞が詩われている）を贈った。

●ピュティア V ▲キュレネのアルケシラオス：

これも、上の勝利を祝ったものであるが、キュレネの女王の兄弟である戦車の操縦者と馬の帰還に際して、おそらくカリネイア祭の間に歌われたものであろう。

●ピュティア VI ▲アクラガスのクセノクラテス：

クセノクラテスは、テロンの弟でのちにアクラガスの支配者になる。この戦車競走の勝利の日付は、前490年でマラ톤の戦いの数日前である。主題

はクセノクラテスであるが、イストミアのⅡと同様に、実際には操縦者である彼の息子トラシュブーロスの献身をテーマとしている。

(公式の頌詩はシモニデースによって書かれたので、ピンダロスが個人的に捧げたものである。)

●ピュティア VII ▲アテネのメガクレス:

アテネのヒポクラテスの息子で、アテネの立法者クレイステネスの甥で養子であるメガクレスは、シュキオンの僭主である(別人の)クレイステネスの娘アガリストと結婚した人である(前述)。オリュンピアで戦車競走に勝ったアルクメオンの曾孫でもある。この4頭立て戦車の勝利は前486年にあたる。

★このあとに続くピュティアのアゴン・ギュムニコスと音楽の頌詩に詩われた勝利者

VⅢアエギナのアリストメネス(レスリング)

Ⅸキュレネのテレシクラテス(武装競走)

Xテッサリアのヒポクレアス(少年往復走)

XⅠテーバイのトラシュダエオス(少年短距離走)

XⅡアクラガスのミダス(笛の競技)

〈ネメア〉

●ネメア I ▲アエトナのクロミオス:

クロミオスはもともとゲラの市民であったが、ゲロンの姉妹と結婚し、やがて前476年にアエトナの総督に任命され、ヒエロンの息子デイノメネスの後見人になった人である。彼のネメアでの戦車競走の勝利は、日付が明確でないが、前476年ころであろう。

★このあとに続くネメアのアゴン・ギュムニコス(ほか)の頌詩に詩われた勝利者

Ⅱアカルナエのティモデモス(パンクラティオン)

Ⅲアエギナのアリストクレイデス（パンクラティオン）

Ⅳアエギナのティマサルコス（少年レスリング）

Ⅴアエギナのピュテアス（パンクラティオン）

Ⅵアエギナのアルキミダス（少年レスリング）

Ⅶアエギナのソゲネス（少年5種競技）

Ⅷアエギナのデイニアス（往復走）

Ⅸアエトナのクロミオス（前出：ネメアのⅠ；戦車競走：これはシュキオンでの勝利）

Xアルゴスのテアエオス（レスリング）

XIテネドスのアリスタゴラス（レスリング・パンクラティオンの地方的な有名選手、評議会議長に選ばれてのもの）

〈イストミア〉

●イストミア Ⅰ ▲テーバイのヘロドトス：

このヘロドトスは、知名な歴史家と同一人物であろう。彼の父アソポドロスは、テーバイの騎兵隊の大隊長として、メガラ人とフィリシア人を攻撃し、600人をうち倒したとヘロドトスは述べている。ピンダロスは、ヘロドトスの戦車競走の勝利をイストミア頌詩の最初に祝っている。ラケダイモンとテーバイがアテネを破ったタナグラの戦いの前458年には、スパルタとテーバイの同盟がまさに完了しようとしていた。したがって、この勝利は前458年の4月であろう。

●イストミア Ⅱ ▲アクラガスのクセノクラテス：

クセノクラテスは、前述のピュティアⅥの頌詩で詩われた人物と同じ人である。この詩は前477年（と思われる）のイストミアにおける戦車競走の勝利を祝ったものである。これも公式の頌詩は彼がまだ若かったので、先輩で著名なシモニデースによって書かれた。

●イストミア Ⅲ ▲テーバイのメリッソス：

メリッソスはイストミア競技のパンクラチオンとネメアの戦車競走で二つの勝利を獲得した。勝利の日付がまちまちで明確ではないが、ネメアの勝利は前475年ころである。これをイストミアのパンクラチオンの勝利と一緒に祝っている。

★このあとに続くイストミアのアゴン・ギュムニコスの頌詩に詩われた勝者

Ⅳテーバイのメリッソス (前出：イストミアⅢ；パンクラティオン；彼は
このあとネメ戦車競走に勝っている)

V, VI アエギナのフュラキダス (パンクラティオン)

VII テーバイのストレプシアデス (パンクラティオン)

VIII アエギナのクレアンドロス (パンクラティオン)

およそアゴン・ヒッピコスに関する頌詩は断片を除けば、上述のようである。

おわりに

これまで主としてパンヘレニック祭を中心に、アゴン・ヒッピコスについて述べてきたが、もちろんギリシア全土の他の都市においても、盛んにこのイベントが催されていた。最も盛んに行われたところは、ギリシアの代表的な都市アテネであった。アテネでは、パンアテナイア祭でアゴン・ヒッピコスのいろいろな種目 (碑文 IG.2,2,965 から 6 つの種目がわかっている) が採用されていた。既述のように、シュキオンの競技 (ネメア 9. 参照) やデロスにおけるデーリア祭での競技 (前426年から)⁴⁴⁾でも、その他多くの地方的競技会でもアゴン・ヒッピコスが取り上げられていたといわれている。

この小論では、ギリシアでの競技が、一般にアゴン・ギュムニコスが強調されている割合には、アゴン・ヒッピコスの情報が少ないことに疑問を抱いていたところ、最近のヨーロッパの専門誌がアゴン・ヒッピコスについて取

り上げるケースが増え、ことにパンヘレニック祭に関しては、これが盛大に
 挙行されたことを知るに及んで、まことに不十分ながら若干の記述を試みる
 ことにした次第である。なお、古代ギリシアのみならず、オリエントも含め
 て古代世界の馬の競技について論じた Olivova の著述にも触発されるところ
 が多かったにで、アゴン・ギュムニコスについて引きつづき論じる機会があ
 ろう。

以上

参考文献および註

- (1) Decker, W.; SPORT IN DER GRIECHEN ANTIKE, München, 1955 p. 23f. 世界百科事典, 平凡社1980, 3巻, p. 253, 254; Olivova, V.; Chariot Racing in the Ancient World, NIKEPHOROS 2, 1989, p. 72
- (2) 取っ手が二つある壺: ナウプリア考古学博物館蔵 (Decker, W; 前掲書, p. 24)
- (3) カルナクス出土, アメノフィスⅡ世の弓射の石碑: 前1438~1412在位 (同上 p. 33)
- (4) 粘土の棺 (λάβραξ) テーベ考古学博物館蔵 (同上 p. 25)
- (5) モヘンジョ・ダロ出土, パキスタン, カラチ国立博物館蔵 (図説 世界の歴史 学習研究社1980 1巻, p. 113)
- (6) 輻 (や) とは, 車輪の中心で軸を通す部分である「轂 (こしき)」から放射状に出て輪を支える木のこと (スポーク)
- (7) ウルの軍旗 前3千年紀前半のもの, ユーフラテス下流のウルから出土。戦争の光景と平和の光景が描かれている。動物に引かせた車は, 4輪車で戦争の光景の中に描かれており, 車輪は円盤状で輻はない。ロンドン, 大英博物館蔵 (図説 世界の歴史 1巻 p. 65)
- (8) アテネ国立考古学博物館蔵 (同上 p. 196)
- (9) ツタンカーメン王の宝物 黄金の儀礼用の団扇にはダチョウの狩りをしている様子を表わしている。2頭立て戦車の上でまさに弓を引きしぼり矢を放たんとする瞬間である。車輪は6輻である。カイロ, エジプト博物館蔵 (同上 p. 59)
- (10) ツタンカーメン王の彩色棺 6輻の2頭立て戦車に乗って狩りをする様子。後方にもう2台の戦車がいる。エジプト博物館蔵 (ブリタニカ国際大百科事典1972, 3巻 Abb. IV)
- (11) 台座に彫られたアッティカの浮き彫り アテネ国立考古学博物館蔵 (同上 1巻 p. 217)
- (12) キウジの2頭立て戦車の壁画 2頭立て戦車が2台あい前後して走っている。競走しているのだろう。車輪は8輻である。前5世紀。(同上 p. 303)

- (14) アッシュール・バニバル王のパレード 彼はアッシリアの王ルーヴル美術館蔵 (同上 p. 73)
- (15) アウグストゥスのカメオ ゲルマン人に対するティベリウスの勝利を記念したもの。ティベリウスが戦車から降りてアウグストゥスのもとへ行こうとしているところが彫られている。ウィーン美術館蔵 (同上 p. 377)
- (16) Decker, W.; 前掲 p. 105
- (17) ホメーロス「イリアス」第23歌『パトロクロスの葬送競技』戦車競走, 拳闘, レスリング, 徒競走, 槍試合, 鉄塊投げ, 弓射, 槍投げ (実際には競技せず賞品だけ与えた); 賞品を出した。
- (18) Decker, W.; 前掲 p. 106
- (19) 同上 p. 107
- (20) パウサニアス「ギリシャ記」飯尾都人訳 龍溪書舎 p. 327f.
- (21) Ebert, J; Neues zum Hippodrom und zu den hippischen Konkurrenzen in Olympia, NIKEPHOROS 2 p. 90-107
- (22) ἄφεσις (アフエシス): パウサニアスは、この出走装置について、次のように述べている: (パウサニアス「ギリシア記」p. 419): オリュンピアのスタートラインの仕掛けを初めて作ったのはクレオイタスである。彼がこの発明を誇りにしていたことが、アテナイにある像についた銘にも記してあり—オリュンピアの馬の出走の仕掛けをはじめて考案したのはアリストクレスの子クレオイタスでこの像の造り手。と; 戦車競走の擬った出走装置 (p. 118) 競技場の競技審判席側の土手を越えて出ると、土手沿いに戦車競走と騎馬競走の出走地点がある。ラインは船のへさきに似た形を見せて、船の衝角にあたる側が走路へ向き、アグナプトス柱廊に面した側が広がっている。そして、ちょうど衝角の先端にあたるところに棒があり、その上に、ブロンズのいるか像がある。スタートラインの両翼は、それぞれ400ブース (118 m; これが Ebert では128 m) 以上の長さがあり、内側に仕切が設けてあって、競技の出場者たちに、くじ引きで割り当てられる。戦車競走でも騎馬競走でも、出走馬の前には停止網用の紐を張る。オリュンピア期ごとに、日干し煉瓦作りで外面に漆喰を塗った祭壇が、なるべくへさき形出走地の中央になるように作られる。祭壇上には、両翼をいっぱい伸ばした鷺が置いてある。出走係りが祭壇内部にある仕掛けを操作する。操作すると、鷺は飛び上がり—その模様が観戦に来た人々によく見えるように仕掛けてある—いるかは地面に落ちる。(鷺はゼウスの、いるかはポセイダンのシンボルであると思われる) アグナプトス柱廊のそばにある停止網が、まずどちらからも弛められ、網に面して立っていた馬が最初に駆け出す。駆け出して、くじ順で2番目の列に立っている馬と並ぶと、その瞬間、2番目の列に張ってある網が弛められる。そして全部の馬を通じて、同じ割合で出走し、こうしてへさきの衝角の線で、互に対等の位置に来ると、ここから先はもはや御者の腕と馬の速さの見せ場とされている。
- (23) Ebert, J.; 前掲書 p. 104
- (24) Decker, W.; 前掲書 p. 180
- (25) 同上 p. 108, 109

- (26) Bell, D.; THE HORSERACE IN ANCIENT GREECE FROM THE PRE-CLASSICAL PERIOD TO THE FIRST CENTURY B.C., Stadion p. 171
- (27) Weiler, I.; Der Sport bei den Völkern der alten Welt, 2.Darmstadt 1988 p. 201
- (28) Ebert, J.; Olympia. Mythos und Geschichte moderner Wettkämpfe, Leipzig 1980 p. 64
- (29) Gardiner, E. N.; Greek Athletic Sports and Festival, London, 1910, p. 52
- (30) Bell, D.; 前掲書, p. 172
- (31) パウサニ阿斯; 前掲書, p. 329
- (32) 同上, p. 402
- (33) 同上, p. 403
- (34) W. Decker 前掲書 p. 110
- (35) ヘロドトス「歴史」6巻, 126-131
- (36) 同上, 6巻, 103
- (37) 同上, 6巻, 122
- (38) トゥーキュディデース, 戦史, 巻6, 16
- (39) パウサニ阿斯 前掲書 p. 189
- (40) 同上 p. 330
- (41) トゥーキュディデース, 前掲書 巻5, 49
- (42) パウサニ阿斯 前掲書 p. 330
- (43) David Bell; 前掲書, p. 169
- (44) 同上 p. 174
- (45) Sir John Sandys; THE ODES OF PINDAR, London, Fragments of uncertain Class 193(205)—The Birth of Pindar—
- (46) Sir John Sandys; THE ODES OF PINDAR, London
- (47) パウサニ阿斯 前掲書 p. 339
- (48) トゥーキュディデース, 前掲書 巻3, 104

(むらやま・てつじろう 法学部教授)